
弱気な少女の勇者伝説

吉田 匠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

弱気な少女の勇者伝説

【Nコード】

N8719T

【作者名】

吉田 匠

【あらすじ】

平凡な少女山崎 百合子は異世界に勇者として来てしまった。しかし百合子は優しく弱気な性格。なのに貰った能力は物凄く………

1話 神託

青年は急ぎ足に気づいていない。

既に夜も更け多くの人達は眠りに付いた頃、王から呼び出しを受けた。

青年の名はレイ・スタンビル。

緑の髪に端正な顔立ち、一見華奢に見えるが見る者が見れば引き締まった身体。

レイの一族は代々王直属の親衛隊を務めており、レイ自身もまだ18歳という若さながら隊長の任務に付くほど有能な人物だ。

足が止まる。

「レイ・スタンビルだ」

扉の前に立ちふさがっていた衛兵二人が無言で退く。

「失礼いたします」

扉を開き片膝を付く。

「済まんなレイ」

「レイ殿このような時刻に申し訳ありません」

「御謝りになられないで下さい。いつ何時でもお呼びならば駆けつけるのが私の務め」

部屋にいたのは初老の男性と若い女性。

初老の男性は短くした金髪に顎髭を蓄えている。温和な表情だが時折見せる視線は鋭い。

若い女性は腰まである長い金髪。容姿は非常に美しいが優しい雰囲気がある。

男性はこの国の王ガラサ・シユイ・エマレリーナ。

女性はその娘であるサーラ・シユイ・エマレリーナ。

「それで一体何が？」

「ヴェルファ様から御神託がありました」

「!？」

サーラの言葉にレイは驚く。

ヴェルファはこの世界の全てを生み出したとされる女神。全ての生きる者の母として世界中で信仰されている。

そのヴェルファから神託が降りる時がある。

大いなる災いを知らせる為に。

それは疫病、自然災害等様々な物。

事前に知ることにより被害を最小限に抑える事が出来てきた。

そしてその神託を聞くことが出来るのが王家の女性。

つまりサーラなのである。

「どの様な？」

レイは息を飲む。

神託を聞く事に確かに被害は抑えられる。しかしそれでも多大な被害は避けられない。

最近の神託は50年前にあり、その時は疫病だった。

策は尽くしたが結局20万人の死者を出した。

「魔王が現れると……」

「魔王!？」

レイの顔色が真っ青になる。

魔王降臨。

それは今から500年前に突如として現れた。

人と非なる者を集い戦争を起こした。

事前に神託で知っていたもののその争いは壮絶なものになり何とか魔王を撃退するのに成功した。

しかし被害は深刻で復興に長い年月を必要とした。

「レイよお主には異世界で勇者を探して来て欲しいのだ」

「勇者殿を………」

勇者。

その魔王襲来の際、魔王を倒し戦争を終わらせたのが勇者だった。

異世界から来た勇者は他を圧倒する力と何事にも怯まない強い心を持っていた。

今でも語り継がれ子供達の憧れとなっている。

「このレイ・スタンビル、必ず勇者殿を見つけ出しお連れいたします!」

レイは強い意志を持って誓った。

翌日。

ガラサ、サーラ、レイの三人は城の地下に居た。

ゴツゴツとした岩が剥き出しの一室は本来王と王女が来る場所ではない。

「用意は宜しいですか？」

「はい」

サーラの問いにしっかりと頷くレイ。

部屋の中央部には円があり、文字のような模様のような物が描かれている。

その円の中心にレイは立っている。

黒いローブにフードを頭からスッポリと被っており肩には麻袋を担いでいる。

「30日経つと自然に元の世界に戻ります。それまでに勇者様を」

「レイよ頼んだぞ」

「はっ、必ず」

サーラは跪き両手を合わせる。

「ヴェルファ様。この者を異なる世界へ……………」

円が淡く光り出しレイを包み込む。

レイは目を瞑り成り行きに身体を任せる。

レイは異世界地球の日本に降り立った。

2話 山崎 百合子

山崎 百合子。

16歳の高校一年。

身長、体重平均。成績は平均より上だが運動神経は平均より下。黒髪のボブカットに大きい瞳は幼いが可愛い。

今まで特に変わった人生ではなく極々平凡に暮らしてきた。

しかし不幸は突如として降りかかる。

「はあはあはあ…」

百合子は夜道を必死に走っていた。

今日は友達の山井 香の家に遊びに行き、つい遅くまで居てしまった。

帰るのに近道をしようと人気の少ない公園を通ったのが失敗だった。

明らかにガラの悪い男数人に囲まれてしまったのだ。

隙を見て逃げ出したのだが男達は追ってきている。

兎に角公園の外に出ればと出口に急ぐ。

「もう直ぐ!!」

見えた出口にはやる気持ち。

「っつかまえた」

しかし待ち伏せされた男に捕まってしまう。

「やっと捕まえたか」

「おめえが鈍いだよ!!」

ゾロゾロと男達が追いつき百合子を山の形をした遊具に連れて行く。

そこは中が空洞になっており4、5人は入れる広さ。

口を抑えられた百合子は暴れるものの男の力の前に何も出来ない。

「ほんじゃジャンケンなあ」

ジャンケンをし出した男達。

数分した後舌打ちした男三人が遊具の外に出る。見張りのようだ。

「さゝ楽しもうな」

「へへへ中々可愛いな」

男達は厭らしい笑みを浮かべ百合子に覆い被さる。

瞳に涙を溜め百合子は首を振る。

（何で！？何で私がこんな目に遭うの！？）

勿論百合子は悪くない。

しかし運が悪かったのだ。

（誰か！？誰か助けて！？）

百合子は願った。

無駄だと知りながら。

が、その願いは叶う事になる。

「……………!!」

外が騒がしくなる。

「んだよ、興醒めだな」

男が一人様子を見ようと外に出る。

すると、

「がふっ!!」

いきなり殴られ意識を失う。

明らかにおかしい事に気付いた男達は百合子から離れ外に出る。

「ぐわっ!!」

「ぐへっ!!」

「ごおっ!!」

男達の声はその後しなくなる。

「大丈夫ですか？」

ガタガタと震える百合子の目に優しく微笑む外国人が映った。

レイが地球に来て29日が経過していた。

当初は驚きの連続だった。

何百何千の鉄の塊が高速で走り巨大な何かが空を飛ぶ。人は見たことのない服装をしており立派な建物が辺りに建っている。

そんな中レイの格好はかなり目立ち何度も職務質問をされる始末。特に苦労したのが食料の確保。

水は公園などの蛇口から出るのを知り安堵したが食料の確保は困難を極めた。

当初は動物を狩る予定だったがそんな場所は中々なく精々小型の鳥や川で魚を釣って飢えを凌いだ。

レイは最近の寢床になっっている公園の遊具にいた。山の形をしているそれは横は吹き抜けで下は砂と決して居心地の良い場所ではないが雨だけでも凌げるのは有り難かった。懐からビー玉大の石を取り出し眺める。

それはサーラから譲り受けた物で勇者が触ると輝く言わば『勇者判定器』のような物。

「早く見つけなくては」
期限まで後1日しかない。

勇者が見つけられないのは許されない。

いやあの王と王女ならレイを責める事はないだろう。レイほどの忠義と真面目な人間は居ないと二人は知っているから。

しかしレイ自身が許せない。王と王女の期待を裏切るなど有り得ない。

「……………ん？」

寝ようとしていたレイだが外の騒がしさに様子を窺う。

其処には一人の少女を取り押さえ此方に向かってくる数人の男達が居た。

奴らがこれから何をするのかは誰の目から見ても明らか。

レイは怒りで我を忘れそうになる。

レイは王の親衛隊隊長であり騎士でもある。

弱きものを守るのが騎士だと、師でもあり今は亡き父から教えられていたレイには許せない行為なのだ。

だが直ぐには助けない、下手をすれば少女を人質に使われ兼ねない。

レイはソツと遊具から出て身を隠す。

男達は暫くした後少女を中に連れ込み三人が外に残る。

レイは素早く三人を叩き伏せる。いくら相手が多人数でも毎日遊び呆けている男達と厳しい訓練をし何度も命懸けの戦いをしているレイにしてみれば問題にならない。

様子がおかしい事に気付いた男達が中から出て来る。

その連中も先程と同様に叩き伏せる。

レイは油断せず警戒するが大丈夫と判断し、ほうと息を吐く。

遊具の中を覗くと少女が自分の身体を抱き震えていた。

取り敢えず大事には至ってない事に安心する。

「大丈夫ですか？」

出来るだけの優しい笑顔で少女に語りかけた。

3話 一人の騎士と一人の少女

「私は山崎 百合子と言います」

「僕はレイ・スタンビル、宜しくね」

あの後レイは百合子に帰るように言ったのだが恐怖のせいか立てず仕方なく落ち着くまで話す事にした。
因みにレイが叩き伏せた男達は依然気を失っている。重傷ではないが後5、6時間は目を覚まさない。

レイは改めて百合子を見る。

可愛らしい子で気弱さが見て取れる。震える姿は小動物のようで保護欲を誘う。

「私が言うのも何だけど何で此处へ？」

数日前からこの公園を寢床にしているレイ。
昼間は勇者探しをしているので解らないが、夜に此处へ来るのはあの男達みたいな暇を持て余している連中だけ。

「家に……帰るのに近道で」小さな声だが答える百合子。

時間が経ち落ち着きを取り戻したのだろう。

「あの……レイさんは外国の方ですか？」

「ええ、まあ」

肯定するもののどう説明するかと考える。

「日本語お上手なんですね」

「結構勉強しましたので」

実は前の勇者が話していた言語が日本語だった。

レイ達の世界を救った勇者を讃え日本語が標準語となったのだ。

「此处で…何を？」

別にレイを不審に見ている訳ではなく会話を途切らせなかった百合子。

話しをしていた方が落ち着くようだ。

「ある方を探しているのです」

「どんな人なんですか？」

レイは「そうですね」と背中を冷たいコンクリートに預ける。

「容姿は解りません。しかも昔我が国を救って頂いたのですが今は生きていません」

「？」

意味が解らないのか首を傾げる百合子。

そんな百合子を見てレイはクスリと微笑む。

「正確にはその方ではなくその方のような人を探しているのです。こちらの勝手な都合で」

そう言って自嘲する。

それはこの世界に来て思った事だった。

いくら自分達の世界に危機が迫って来たからと言って異世界から助

けを請うなど、連れて来られた人にとっては迷惑以外の何でもない。本当に良いのだろうか？と、ここ数日レイの頭の中にはそれが居座っていた。

それが未だ勇者を見つけられない原因の一つと言える。

「そう…ですか」

レイの雰囲気言葉が見つからない百合子。

「もう立てますか？」

暫くの無言の後レイはそう百合子に問いかける。

「あ、はい」

しっかりと立ち上がった百合子は遊具から出る。

倒れている男達を見てギョツとするが目を逸らす。

「宜しかったらお送りしましょうか？」

「いえ…近くなので大丈夫です」

レイを警戒してる訳ではない。

携帯を見ると時刻は0時近く、友達や家からの着信が20件以上あった。

恐らく帰りの遅い百合子を心配して両親が友達に連絡したりしているのだろう。もしかしたら探し回っているかも知れない。

そんな時に如何にも怪しいレイと一緒に帰宅する所を見られたらレイが怪しまれ面倒事になる。

恩人のレイをそんな目に遭わせたくはなかった。

「では気を付けてお帰り下さい。何か有ったら大声を上げて下さい、直ぐ助けに参ります」

「有難う御座います」

その言葉に嬉しくなり頭を下げる百合子。

百合子は鼓動が早くなるのを自覚する。

身元は怪しいが男で有りながら美しい容姿に自分の危機に颯爽と現れ救ってくれたレイはさながらヒーローであり少女なら夢見る『白馬の王子様』と言っても過言でない。

百合子は今時の16歳なので「何時か白馬の王子様が私を迎えに来てくれる」のような願望はない。

しかしレイに好意を持つには充分だった。

まともにレイの顔を見れない百合子は下を向いていた時にレイからビー玉のような石が落ちるのが目に入った。

「あの、落としましたよ」

百合子その石を拾った。

その瞬間石は目も眩む程輝き出す。

「きゃっ!!」

驚いた百合子は思わずその石を放してしまう。
すると石は元に戻った。

「あの……」

分けが解らない百合子は恐る恐るレイに声を掛ける。
しかしレイは目を見開き固まっていた。

「あなたが……」

レイはそう呟くと百合子を凝視する。

「えっと…私何かしてしまっただんでしょうか？」

「い、いや！？これは……」

レイは慌ててその石を拾う。

「こ、これは……そうー！占いの石でね、光ればその者に幸運が訪れるという代物なんだー！」

「じゃあ今のは……」

「そう、これからあなたに幸運が訪れるんですよー！」

「嬉しいです……」

ニツコリ微笑む百合子にレイはホッとする。

「さあもう帰った方がいい」

「はい……本当に有難う御座いましたー！」

そう言っただけ百合子は走り去っていった。

「まさか彼女が……」

茫然とするレイ。

目的であり任務である勇者が見つかった。

本来なら喜ぶ事である。

しかしレイの心中は重かった。

最近の勇者探しに乗り気で無かったのもあるし何よりその勇者が百

百合子であった事。

少しの時間だったと話して百合子に関して分かった事がある。それは百合子は優しく争いを好まない性格だと言うこと。

勇者になれば相手は人ではないものの殺し合いをする事に変わりは無い。

とても百合子にそんな事が出来るとは思えなかった。

「ヴェルファ様、あなたは私にどうしろと……」

「あれこんな時間？」

携帯で時間を確認する。

23時40分。

百合子はベッドから降りる。

あれから1日経っていた。

百合子の予想通り両親は探し回っており大変な状況になっていた。

百合子を見つけた両親はまず無事だった事に安堵し、そして叱った。

素直に謝る百合子にもうこんな事はないようにと注意した両親。

何があったのかと聞く両親に百合子は転んで気絶していたと無理がある説明をした。

本当の事を言えばレイの事話さなくてはならないので言えなかった。

何とか両親を納得させようやく百合子は帰宅した。

翌日は学校だった。が両親に半ば無理矢理に休まされた。夕方になると友人である香が家を訪れ、泣きながら謝られた。香は自分の家をとこの前に出た百合子がまだ帰宅してない事を百合子の両親から聞き友人達と探していたと言う。

百合子も謝り、話しをした後香は帰り百合子は寝た。

で、起きたのが今である。

お腹の空いた百合子は部屋を出て台所まで来る。

テーブルにはラップの掛かった料理があり「よく寝ていたので起こしませんでした。お腹が空いたら食べなさい」と、書かれた紙があった。

小さな声でお礼を言った百合子は食事をし、部屋に戻った。

夜空をぼうつと眺めレイの事を考える。

彼は一体何者なのだろう？

見た目は外国人だが流暢な日本語を話し、百合子を襲った男達を怪我無く倒す強さ。そこらの俳優等霞む程の容姿に礼儀正しい態度。百合子が今まで会った事のない人物、いやこの先も会うことは無いだろう。

まだあの公園に居るのだろうか？

会いたい。

百合子は着替え静かに外へ出る。

昨日あれだけ心配させたのにこんな時間に外へ行くなんて駄目な事は百合子も充分解っている。

しかし自分でもこの衝動が止められない。

百合子の姿は闇に消えていった。

月を頭上にレイの身体は淡い光に包まれている。

結局あれから勇者は見つからず……いや探さなかった。

そんな気にならずただ目的も無く街をさ迷い夜になるとこの公園に戻っていた。百合子が勇者だと知ったレイは諦めた。

彼女を勇者として連れて行くぐらいなら見つからなかったと報告すると決め、騎士を辞める覚悟をした。

王と王女はレイを責める事はしないだろう。

しかしそれではレイ自身が許せない。

王と王女からの直接受け、国の存亡に関わる任務の失敗。それも目的の人物が見つかったというのに連れていけない。

首を斬られてもおかしくない。

なのでそう言った処罰が下ってもレイは甘んじて受け入れるつもりだ。

百合子に血生臭い戦いをさせるぐらいなら……

レイの身体に蛍のような光が集まり出す。

元の世界への帰還がもう直ぐ始まる。

この世界に来て出会った少女。

話した時間は僅かだったが楽しかった。

「百合子殿……」

恐らくもう会えないだろう少女の名を呟く。

「はい、何ですか」

帰ってきた声に驚き振り向く。

そこにはキョトンとした百合子が居た。

「百合子殿！？不味い！！」

レイは百合子から離れようとする。

「くっ！？」

「え？」

しかし光は一気に膨れ上がり二人を包み込む。

二人の姿はもう其処にはなかった。

4話 小さな決意

「私が勇者？」

百合子は小首を傾げた。

光に飲み込まれたレイと百合子は薄暗い地下室にいた。

其処は30日前レイが地球に旅立った場所だった。

分けが解らない百合子はキョロキョロと辺りを見渡すだけだったがレイはかなり動揺していた。

だが目の前には自分を見送ってくれた時のように王ガラサと王女サーラが居たため態度に出す事はなかった。

場所をガラサの私室に移した4人。

其処でガラサとサーラが名と身分を明かし百合子が此処にいる理由を説明した。

神託によりこの世界に危機が迫っており、その危機を救うのに異世界から勇者を探し出し連れてくる任務をレイが請けそしてその勇者が百合子であると。

「でも私強くないですよ？」

「力はこれから授かる事になります。それにこれが証拠となります」

サーラは丸い石を取り出し百合子に差し出す。

百合子は両手を出すとサーラはその上に石を置く。すると昨夜のように石は眩い光を発する。

「きゃっ！？あれ？これって……」

百合子はそれに見覚えがあった。

「この石は昔勇者様が身につけていた物で、勇者としての資質を持つている者が触れるとこうなります」

「へえ」

感心したような声を上げるが実際の所よく解ってなかったりする。

「これでこの世界も救われるでしょう」

「サーラ様、宜しいでしょうか？」

「レイ、如何しました？」

レイは跪き決意の籠もった表情をサーラに向ける。

「百合子殿を元の世界に戻しては頂けないでしょうか」

「……！」

サーラとガラサは驚愕の表情になる。

レイの言葉は王と王女の意向を真っ向から否定するものだから。

「レイ！！お主自分が何を言っているのか解っておるのか！！」

「お待ち下さいお父様」

激昂するガラサをサーラは止める。

「何か理由がありなのでしょう。レイ殿仰って下さい」

毅然とレイを見下ろすサーラ。

戯れなら決して許さないと瞳がレイを捉える。

「確かに百合子殿は勇者としての資質があるようです。しかし彼女の性格は戦いに向いておりません」
緊張に身を固くしながらレイは言う。

「短い時間ですが百合子殿と話す機会がありました。百合子殿は優しく穏やかな方です、もし相応の力を得たとしても精神が持つとは思えないのです」

「……………レイ殿。あなたの言う事は解ります。しかしいつ魔王が現れこの世界を蹂躪するかも知れないのですよ」

「それでも!!」

レイは声を荒げてしまう。
王族相手に有り得ない態度。しかし溢れ出る感情を抑えない。

「元は私達の世界の事!!異世界の住民である百合子殿には関係の無い事なのではないでしょうか!？」

その言葉にガラサは顔を歪めサーラは悲痛な面持ちになる。

「それはあなたの言う通りですレイ殿」
「では!？」

サーラは首を力無く横に振る。

「百合子殿を元の世界に戻す手段はありません、あなたを送ったあの装置です。しかしあれを起動させるためには 膨大な魔力が必要なのです」

「どれほどなのでしょう?」

「魔力回復は待つしかありません。年数は約200年……」

「そ、そんな……」
うなだれるレイ。

自分の不注意で百合子に二度と故郷の土を踏ませられない。悔や
んでも悔やみきれない思いがレイにのし掛かる。

「あ、あの」

今まで黙っていた百合子が話し出す。
ようやく理解出来てきたようだ。

「済まない百合子殿。全て私のせいだ……」
レイは頭を下げたまま。とても百合子の顔を見れない。

「私……勇者やってみます」

「ゆ、百合子殿！？何を！？」

百合子の言葉にレイは驚き立ち上がる。

「私自身まだ状況がよく解ってないと思います。でも私が此处に居
るのは偶然じゃない気がするんです」

思えば香の家から自分の家に帰る時公園を通らなければレイに会う
事はなかった。さらには夜中家を出なければ。五分いや三分家を出
るのが遅かったら此处には居ない。

どれか一つでも違う行動をしていたら………

だから百合子は自分が此处に居るのは必然と思ってしまう。

レイは自分を助けてくれたから恨むなんて事は出来ない。

ガラサとサーラがレイに命令しなければとも思っがそれを言ったら
キリがない。

生きてる内に元の世界に戻れないと聞いた時百合子は意外とシヨツ

クを受けてなかった。まあまだ実感がないだけかも知れないのだが。
何よりこれ以上レイの苦しむ様子を見たくなかった。

「百合子様」

サーラは深々と頭を下げる。

いくら相手が勇者と思わしき百合子だとしても王族が頭を下げるなど本来有り得ない。

「図々しいを承知でお願い致します。この世界を民達を救うのに手をお貸し下さい」

「わわっ！？頭を上げて下さい！？私ができる事ならやりますから」

「百合子殿」レイが百合子の前で跪く。

「この私レイ・スタンビルは命を賭けてあなたを御守り致します」

「レイさんまで！？止めて下さいよお」

そんな二人を宥める百合子だが内心では、

（私が勇者かあ…何かゲームみたい）

と、呑気な事を思っていた。

5話 得る力

静寂に包まれた空間。

神聖な空気に身体が清められてような感じがする。

広さは百合子の通う高校の体育館程ある。全面真っ白で微かな光を反射して意外と明るい。

中央部には噴水の様な物がある。

円形で直径三メートル程。足首位の水が張られており近くまで来なければ解らない程の透明感。

「此処が『邂逅の泉』です」

サーラの言葉に百合子は息を呑む。

「百合子さんそんなに緊張しなくてもよいですよ」

「う、うん」

サーラが優しく語りかける。

サーラ、百合子の二人は馬車で揺られ街を移動している。

「ここアルカード王国の王都シャジャルの人口は約50万人おり世界有数の大都市です」

「あの建物何!？」

「グラング時計台です。このシャジャルで一番高い建物なんです」

「あの人尻尾が生えてる!？」

「獣人ですね。王都ですから様々な種族の人達が住んでますし訪れるんです」

馬車内は百合子の向かいにサーラが座る。

物珍しい百合子は先程からサーラに質問攻めしている。

そんな百合子相手にサーラはバスガイドのように説明していた。

「見えて来ましたよ」

馬車の進む方向に白い建物が見えてくる。

見た目は古代ローマ時代の神殿のようで近づくにつれ白と言つより乳白色っぽい。

神殿の前で馬車は止まり二人が降りると一人の男性が待ち受けていた。

白い何の装飾のないローブ。痩せていて白髪から老人にも見えるが背筋は真っ直ぐしており姿勢はいい。

「サーラ様。お待ちしております」

「ルーレ殿此方が百合子殿です」

「山崎 百合子です」

「ルーレと申します。この神殿を任されている者です」
頭を下げ挨拶する百合子に微笑みながらそれを受けるルーレ。まるで校長と生徒のようだ。

「では中へ」

ルーレに促され神殿内へ入る。
カッソーンカッソーンと歩く度に響く。

「もう一度説明しときますね」

「は、はい」

サーラが百合子と並ぶ。

「この世界で特別な力『神の奇跡』を使うにはこの神殿内にある『邂逅の泉』
に入らなければなりません。そこで神と会つのです」

「神様と会えるなんて凄いなあ……」

「くすつ、確かにそうですね。そして契約をすれば『神の奇跡』を
行使出来ます」

「例えばどんなのです?」

「火を灯せたり風を起こしたりとそれ意外にも様々あります」

（魔法みたいなのかな？）

百合子の頭の中で某RPGが思い浮かぶ。

「ただ契約の仕方は色々あり危険な事もあります」

「えー？」

ビクツと身体を震わせる百合子。

「もし危ないと判断した時は契約を断っても構いません。契約出来る神は一人だけとは限りませんから」

「因みにサーラさんは？」

「私の時は幾つもの地獄を見せられました。人が人を殺し殺され絶望に覆い尽くされた地獄を」

「……………」

「正直気が狂うかと思いました」

「帰りたいです」

「大丈夫ですよ。私は断る事が出来る立場ではなかったただけですから」

そんな話をしていると前を歩いていたルーレの足が止まる。

「着きましたね。ここが『邂逅の泉』です」

「う、うん」

「では百合子殿、お入り下さい」

「解りました」

百合子は靴と靴下を脱ぎ水へ入る。
水は温かく気持ちいい。

（ん？あれ？）

百合子は自分の意識が遠くなる。
前に一度あつた貧血のような感じ。

百合子の意識は落ちていった。

閑話 親衛隊隊長の憂鬱

「レイ隊長どうかなさいましたか？」

「……いや何でもない」

此処は城の修練場。

総勢50人の親衛隊が訓練を行っている。

隊長であるレイが指導しているのだがどこか上の空。

原因は百合子である。

百合子はサーラに連れられ神殿に行っている。

『神の奇跡』の力を得る為に。

当然レイも同行するつもりだったがサーラから親衛隊の訓練を行うようにと言い渡されたのだ。

女性が『邂逅の泉』に入る場合ルーレ以外の男性は神殿内は立ち入り禁止の規則がある。

それでもレイはせめて神殿の前まで付いて行きたかったのだが聞き入れて貰えなかった。

「ふう……………」

ため息一つ。

サーラの言うこともレイは充分理解している。

親衛隊隊長である自身が30日もの間留守にしていた。

帰還した以上本来の職務をするのは当然の事。

しかしレイは百合子を守ると誓った。

なのに自分は此処にいる矛盾。

「隊長お疲れでしたら休憩しては？」

「そうですよ隊長、修業の旅から帰ってきたばかりなのですから」
実はレイが居ない理由が諸国へ修業に出ていたという事になっている。

百合子の件は事が起こるまでは最重要機密扱いになっている為だ。

「解った、済まないな」

体調自体は問題ないのだが百合子の事が気になり訓練に集中出来な
いでいた。そんな状態では邪魔にもなり怪我をする危険もあったの
でレイは素直に休む事にした。

木に背中を預け座り込むレイ。

そしてその様子をソツと見守る隊員達なのだがその全員が女性隊員
だ。

親衛隊50人の内女性隊員は40人になる。

その女性隊員はレイを好意と憧れの眼差しで見ている。

それは無理も無く18歳の若さで親衛隊隊長になる実力に端正な容
姿。性格も実直で部下に優しく家柄も文句なし。

モテないわけではない。

今居る女性隊員の殆どがレイの部下になりお近づきになりたいため
厳しい親衛隊の試験を合格した猛者達である。その中でレイにモー
ションを掛ける女性は何論居る。

しかしお約束なのかそう言う好青年ほど鈍感で女性隊員の好意に全
く気付かず無惨に散っている。

何時しか女性隊員の間に協定が出来、抜け駆け厳禁と現在はなっ
ている。

しかし隙あらばと狙う者も多い。

（百合子殿……………）

そんな女性隊員の眼差しに気付かないレイはぼんやりと百合子を想うのだった。

6話 神々との邂逅？

「また別の世界に來ちゃったのかな？」

意識が戻った百合子の目に映ったのは草原だった。
雲一つ無い青空に風に揺れる見渡す限りの草。

どうしたものかと暫く歩くと何か見えてくる。

それはテーブルに二脚の椅子。

取り敢えず座るとティーセットがあつたので淹れてみる事にする。
が、百合子の家庭ではこういった物はなく勿論やった事もない。
適当に葉を入れ適当に淹れる。
香りからして紅茶のようだ。

「苦！？」

飲んでみると口一杯に苦味が広がる。

「そんな淹れ方じゃ駄目よ。私がやってあげるわ」

その声の主を百合子は見やる。

凄い美女で綺麗な銀髪をアップで纏め体には銀色の布が巻かれているだけなのだが不思議と似合っている。

百合子より年上なのは確かだろうが年齢はよく解らない。

彼女は慣れた手つきで紅茶を淹れ百合子と自分の前に置く。

「美味しい……」

一口飲むと思わず言葉が出る。
芳醇な香りが広がり心地良い。

「凄い…私が淹れたのと全然違う」

「慣れよ慣れ。良かったら教えて上げましょうか？」

「是非！！」

それから葉の量や湯の温度、手順などを教えて貰い百合子にも美味しい紅茶が淹れられるようになった。

「……………所でどなたですか？」

「今頃？呑気な子ねえ」

彼女は可笑しそうに笑いカップを置く。

「あなた私達と契約しに来たんでしょ？」

「え〜と……………あ！？そうですそうです！！って此処は何処なんですか？」

「此処はあなたの精神を元にした世界。『邂逅の泉』に入っただしょ？あれに入るとあなたの精神が私達を迎え入れる世界を造るの」

「へえ〜みんなこんな風なんですか？」

「いいえ色々。人によつては火の海だったり山の中だったり砂漠だったりね。その人の歩んできた人生とか思考が影響するの」

「じゃあこの風景からして私はどうなんでしょう？」

彼女はグルリと周りを見渡す。

「爽やかだけど呑気者かしら。性格は良いと言うよりお人好しかしらね」

「あはは…よく言われます」

友達や親から「あなたは呑気ねえ」と言われていたのを思い出す。

「ん？ならあなたはもしかして……」

「あなた達からすると神様ね。私は女神だけど」

「あなたが……」

百合子はマジマジと目の前の女性を見る。

確かにとんでもない美女だが何とというか妙に俗っぽく親近感もある。

例えられるなら近所の奇麗なお姉さんが合う。

「そうだ！？契約だ！！」でも……

ようやく百合子は目的を思い出したが同時にサーラの言っていた事
も思い出す。

契約には危険な事もあると。

「契約？良いわよあなたの事気に入ったし」

「でもあの……」

言いよどむ百合子に最初首を傾げていたが何か思い立つ。

「私は危ない事なんかしないわよ、面倒だから」

「本当ですか!?!」

「言ったでしょ、あなたを気に入ったって。そうね…契約は乾杯にしましょ」

「乾杯ですか?」

「そ。ほらカップを上げて」

百合子と彼女はお互いカップを持ち上げる。

「あなた名前は?」

「百合子…山崎 百合子と言います」

「私はアフラレーヌ。時の女神なんて言われてるわ。乾杯!!!」

「乾杯!!!」

カップが当たりチンツと音を立てる。

紅茶を飲み干すと百合子に変化が起こる。

見た目は変わらないが身体の奥から何かが湧き出る感じがし情報が頭の中に入ってくる。それは『神の奇跡』の能力と使い方。

「どう?」

「何ですこの出鱈目なの……………」

その能力の内容に言葉を失う百合子。

「百合子なら大丈夫よ」

「そうでしょうか……」

不安そうな百合子にアフレレー又はポンポンと肩に手を置く。

「私は人を見る目があるのよ、女神だけにね」

アフレレー又は百合子が見惚れるほどの笑顔を見せた。

「ありがとうございますアフレレー又さん!!」

「うんいい顔ね。おつ、次のお客さんよ」

「え？」

7話 神々との邂逅？

いきなり壁が現れた。

「きゃあ!？」

驚き椅子から転げ落ちてしまう。

しかしそのお陰で壁の正体が解った。

男。それもかなりの大男。

見上げる程高く目寸法だが三メートルはある。

赤い髪は燃えるように逆立ち顔はまるで達磨のように厳つい。全身を鎧で包む姿はまさに巨兵。

「あんた何しての!!」

ガッ!!

「ぐおおあ!!」

アフラレーヌがその大男の脛を思いつ切り蹴る。

大男は悶絶し痛みから転げ回る。

「百合子大丈夫？」

「はい、ビックリしただけですから」

アフラレーヌは百合子の手を引き起きあがらせ服の汚れをはたき落とす。それは本当の姉妹のよう。

「酷いではないかアフラレーヌ」

「五月蠅い、あんたみたいな図体のデカイ奴がいきなり出てくるな」

「なに、ほんの茶目っ気だ」

「その顔で茶目っ気出されてもキモイだけなのよ」

「がぁははは！！相変わらずお主はキツいのう」

結構口の悪いアフレーヌだが大男は慣れてるのか気にしていないようだ。

「で、娘よ」

「は、はい」

大男は真面目な顔になり百合子に話しかける。

「僕は闘神ザンジバル。お主名は？」

「山崎 百合子と言います」

ザンジバルは顎に手をやり百合子を見やる。

「ふむ、百合子よ僕と契約するか？」

「契約の内容を教えて貰っても？」

「そんなもの決まっておる」
ザンジバルはニヤリとし、

「僕は闘神！！お互い死力を尽くして闘うのだ！！」

目に炎を灯し力強く言い放つ。

「えっと……遠慮します」

「何故！！」

少し考え断る百合子に少なからずショックを受けるザンジバル。

「私強く無いですしそれに喧嘩とか苦手で」

「喧嘩ではないぞ！？力と誇りをぶつけ合う神聖な闘いだ！！」

「でも殴り合ったりするんですよね？」

「勿論そうだ！！それによってお互いが分かり合ったりするだろう
！？」

「………済みませんよく解らないです」

ザンジバルは所謂体育会系。しかし百合子は中高通し文化系の部活に入っていてそのノリについて行けない。

「百合子よ、よく考えてくれ。僕の力を得れば闘いにおいてほぼ無敵になるのだ。魅力だろう？」

「でも………」

渋る百合子。

勇者になれば戦わなければならない時もあるだろうし、その時ザンジバルの力があれば恐らく助かるだろうとは予想出来る。

しかし百合子のこれまでの人生は闘いなどとは無縁だった。

平和な現代日本に生まれたという事もあるし元々格闘技やボクシングを見るのも苦手なのだ。

勿論自分が傷つくは嫌だ。しかし同じ位傷つけるのも嫌なのだ。甘い考えなのは百合子自身も解ってはいるが受け入れるのに抵抗があった。

「百合子」

二人のやり取りを黙って聞いていたアフラレーヌが話し出す。

「確かに力は相手を傷つける。でも力があれば大事な人を守る事も出来る。要は百合子次第なのよ」

「大事な……………」

百合子にとって大事な人。

それは両親であり友人。

しかしこの世界には居ない。

じゃあ誰か……………」

百合子の頭に一人の青年が思い浮かぶ。

元の世界で自分を助けてくれてこの世界に来てしまった時、必死に元の世界に戻してくれるよう王女に懇願した青年。

彼はこれからどんな事が遭ってもどんな目に遭っても百合子を守ろうとするだろう。

では自分は守られているだけでいいのか？

（それは何か嫌だなあ…）

「ザンジバルさん。私あなたと契約します」

「おお！！決心したか！！では……………」

「待った。ザンジバル、別に殴り合う必要はないんでしょう？」
いきり立つザンジバルをアフラレーヌが止める。

「まあ闘いならよいが？」

「だったら百合子に決めさせたら？」

「え？いいんですか？」

「アフラレーヌ！！何を勝手な事を！！」

「だって百合子が傷つくの見たくないし。それに何？どうしても女の子を殴りたいの？」

「うぐぐぐ……………ええい！！好きにせい！！百合子お主が決める！！」

「だ、そうよ百合子。決めちゃいなさい」

そう言つて百合子にウィンクするアフラレーヌ。

「はい、え」と……………」

アフラレーヌに感謝し思案する百合子。

「『あっち向いてホイ』で」

契約内容を決めた百合子はルールをザンジバルに教える。

『あっち向いてホイ』は知らなかったがジャンケンに似たものは有ったようで問題無く理解して貰った。
勝負は一回のみ。

「……………」
「……………」

真剣な表情の二人に楽しそうに観覧するアフラレーヌ。

「ジャンケンポイッ!!」

ザンジバル。グー。
百合子。パー。

「あっち向いてホイッ!!」
百合子から見て右を指す。
ザンジバルから見て左を向く。

「やったー!!アフラレーヌさん!!」

「ぐうおわあ!!」

アフラレーヌに抱きつき喜ぶ百合子に地面に突っ伏すザンジバル。

「納得し難い想いがあるのだが……」

「言い訳は見苦しいわよ。さっさとやりなさい」

「解っておるわ。百合子よ受け取れ」

ザンジバルは百合子の頭に手を置く。

百合子の頭に力の使い方が湧き出て来る。

「……………物騒ですね」

「野蛮とも言っわね」

「酷くないかの二人して」

青さめる百合子に笑うアフラレーヌ。ザンジバルは少しだが落ち込む。

そんな時三人に突風が襲った。

8話 神々との邂逅？

「な、何ですか!？」

突然の突風に驚きつつ飛ばされないよう地面の草ににしがみつく百合子。

「いい加減にせんかエスリ!!」

ザンジバルが空に向け一喝する。

すると風は元の穏やかなそよ風になる。

「ザンジバル居たのかい？」

少年が姿を現す。

黄緑の髪に服はまるで某ピーターパン。イタズラが成功したとばかりに無邪気に笑う。

しかし一つ明らかに人と違う、それは身長が30センチ程しかない。

百合子は漠然と童話の妖精を想像する。

「そんなに怒るなよ君の巨体ならなんて事はないだろ？」

「僕はいいんじゃないかな…」

「何だよはつきり………熱いいー!!」

「髪が乱れたでしょう?」頭から熱湯を掛けられ転げ回る少年にアフラレーヌはカップを手に言う。

「アフラレーヌが居るぞ」

「はあはあ……酷い目に遭った」

少年は落ち着いたのかフワリと浮きテーブルの上に乗る。

「君、名前は？」

「山崎 百合子です。あなたも神様何ですか？」

「勿論そうさ。僕は風のエスリ、よろしくお嬢さん」

童話の王子様のような口調と礼はその姿に合わないが可愛らしい。

「百合子騙されちゃ駄目よ、性格悪いからコイツ」
乱れた髪を直しながらアフラレーヌ。

「僕は自由なだけさ」

「あんたの自由さが迷惑なのよ!!」

どうやらマイペースなエスリにアフラレーヌは苛ついているようだ。

百合子は友人の香と弟の智宏のやり取りを思い出していた。

「よさぬか二人共。エスリよ契約をしに来たのだろう?」

「ああそうさ」

前髪をピンツと弾き百合子に向く。

キザっぽい態度だがその姿だと嫌みが無い。

アフラレーヌは感に触るのかイライラした様子だが。

「百合子さん僕と契約するかい?」

「契約は痛い事しない？」

「勿論。レディーを傷付けるなんて事しないさ」

「いちいちムカつく……………」

「なら契約する」

アフラレーヌが何やら言っているが百合子に断る理由はない。

「では僕との契約は追いかっこさ。逃げる僕を捕まえれば契約完了。君が諦めるまで続ける」

「うん解った」

「じゃスタート!!」

エスリは空を舞った。

皆さんは鳥を素手で捕まえられるだろうか？
鶏みたいに飛ばない鳥なら何とかなるだろう。
なら飛ぶ鳥は？

百合子は地面に倒れていた。
飛びだしたエスリはとんでもなく速い。

追いかけるも人並み程度の体力しかない　百合子では無理な話だった。

「参ったなあ」

甘く見過ぎてたかと少し後悔する。

エスリは百合子の手の届くギリギリの高さで飛び捕まりそうになると急上昇して回避している。

まさに余裕と言える。

「百合子休憩なさい」

アフラレーヌが手招きで百合子と呼ぶ。

流石に疲れた百合子は素直にそれを受けテーブルにつき淹れて貰った紅茶を飲む。アフラレーヌが気を利かせ蜂蜜を多めに入れてくれた紅茶が美味しい。

「あんなのと契約する事ないんじゃない？」

やはりアフラレーヌはエスリを気に入らないようだ。

「言うでないアフラレーヌ。決めるのは百合子だ」

巨体で椅子に座れないザンジバルは地面に座っている。

「ありがとうアフラレーヌさん。でももう少し頑張ってみる」

「そう？ならいいけど」

百合子が笑顔で言うアフラレーヌは照れた顔を隠すように背ける。

「しかし百合子、このままでは埒があかんぞ」

ザンジバルの言うとおりこのままだと百合子にエスリは捕まえられない。

「うっん、ですよね……」

百合子は口に指を当て考える。

普通では無理。

不意をついても百合子の運動神経では駄目なのは予想出来る。

「なら相手から来て貰おうかな……ちょっと卑怯だけど」

どうしたものかとエスリは追いかけてつこを続けていた。

百合子の動きでは自分を捕まえない。

そうすると契約は失敗となる。百合子の事は嫌いではないし力を与えるのもやぶさかではない。

しかし決めた事はエスリの名に賭け変更出来ないし手を抜くのも出来ない。

百合子がザンジバルとの契約完了したので中々出来るのではないかと推測しこの方法をとったエスリだったが、まさかそれが『あっち向いてホイ』だとは思わなかった。

アフラレー又は気に入れば契約完了するし逆ならしなので参考にならない事をエスリは知っていた。

「うっ!!」

突然エスリを追いかけていた百合子がお腹を押さえしやがみ込む。

「どうしたんだい百合子!？」

「持病の癪が………」

急旋回し百合子に近付くエスリ。

「ならもう止めた方が…」

「捕まえました!!」

「え？」

百合子は優しく両手でエスリを掴む。

「ゴメンなさいエスリ。具合は悪くないんです」

「嘘かい？」

「うん……」

気まずく俯く百合子。

「やられたなエスリ。がぁははは!!」

「アツサリ引っ掛かつちゃって」

ザンジバルとアフラレーヌが側までやって来る。

「ふっやられたね」

「本当にゴメンねエスリ」

「謝る事はないよ。駄目なら策を練るのは当然の事さ。それに……」

エスリはスルリと手から抜け出し百合子の肩に乗り頬にキスをする。

「それぐらいの事を出来る女性の方が素敵さ」

「やっぱムカつく!!」

エスリを叩くアフレレー又だった。

9 話 得た力

「…………そろそろね」

アフラレーヌが言うと同時に草原の風景が波打つように揺らぐ。

「え？え？」

「大丈夫、元の世界に戻るだけだから」

オロオロする百合子を落ち着かせるようにアフラレーヌは言う。

「また皆さんと会えますか？」

「うむ。契約を完了した我々と百合子とは意識が繋がっている」

「何時もとはいきませんが夢の中なら会えますよ」

「そ、だからしっかりね。百合子を苛める奴らがいたら存分に暴れてやんなさい」

「あはは…」

次第に揺らぎは大きくなり百合子の意識が遠くなる。

「皆…………さん…………あり…………が…………」

意識が戻るとそこは『邂逅の泉』だった。

「百合子さんお帰りなさい」

サーラが笑顔で百合子を出迎えた。

「私此処にずっと居たんですか？」

「ええ。 と言つてもほんの五分ほどでしたよ」

「そうなんだ……………」

体感としては五、六時間位あつちに居た様な気がしたので不思議な
感じに呆ける百合子。

「どうでした？」

「えっと、契約してきました」

「それは良かったですでは戻りましょうか？」

「はい！！」

百合子の帰還を聞き急いでその場所に向かっていた。

「レイ・スタンビルです」

立ちふさがっていた兵士は退きレイは室内に入る。

中には既に五人の男女が部屋にあるテーブルに着いている。

長方形のテーブルの一番奥には王ガラサと王女サーラ。テーブルの横には他の三名が並んでいる。

まずは宰相ファブラテ。小柄な老人で時折ズレた眼鏡を直している。

向かいに座るのが軍事最高司令官ワトリ。赤毛の髪に口髭を蓄えた中年の男性。

ファブラテの隣に居るのが神の奇跡王宮統括責任者リゼレバ。長い銀髪に眠たそうな表情の女性。

この五人にレイを含めた計六人だけが勇者である百合子の存在を知っている。

「サーラ様百合子殿は？」

「お疲れの様でしたのでお休みになられています」

「そうですか…」

会えると思っていたレイは落胆するがすぐにそれもそうかと思い直す。以前自分も『邂逅の泉』を経験した時に相当精神を疲労したからだ。

「失礼します」

レイはワトリの隣に座る。

「ではこれより始める。サーラ」
ガラサが言った後サーラは頷く。

「これから話す内容は王宮最高機密に指定します」
サーラはそう宣言し周りを見渡す。
皆神妙な顔つきで場には緊張感が漂う。

「百合子様の神々との契約が完了しました。リゼレバ殿お願いします」

「はい」

リゼレバが立ち上がる。

「百合子様と契約した神は三人」
「おお」と場がざわめく。

神との契約は殆どが一人。稀に二人。
三人となると過去に二十人いたかどうかの珍しい事。

「百合子様からお聞きした神の名ですが……」
リゼレバは羊皮紙を手取る。

「まずは風のエスリ。神順位で45位」

「何と、それ程の高順位の神と契約したのですか……」
宰相のファブラテが驚いたように言う。

神順位とは文字通り神の順列を表した物。 数字が少なければ少な

い程高位で力のある神とされている。

これはこの世界の住民が解りやすく順位分けしただけで実際神達の間で順位などはない。

確認されている神の人数は約2万。100以内の神と契約していればどの国でも引く手数多なのだ。

「風ですか」

実はレイも風系の神と契約している。

名はフォー、神順位で78位。

百合子が同じ風系の神と契約したのを知り、これで何か教える事が出来ると嬉しくなる。

神順位は百合子の方が上だが、百合子は勇者の資質を持つ者。自分とは根本からして違うので特に何も思わない。

「次に闘神ザンジバル。神順位は12位」

「何だと!!」

テーブルを叩き怒りの籠もった怒声を上げたのはワトリ。

「リゼレバ!! いい加減な嘘を言うな!!」

「ひい!?!」

ワトリの怒りにリゼレバは怯え羊皮紙で顔を隠す。

「ワトリ殿お止めなさい」

「しかしサーラ様!!ザンジバル様があのような小娘と契約するなど有り得ない事!!」

「黙りなさい！！これ以上百合子殿を侮辱するなら許しません！！」

「ぐっ……………申し訳ありません我を見失ってしまいました」

サーラの毅然とした態度にワトリは怒りを収める。

ワトリの怒りには理由がある。

ワトリの故郷はこの国ではなく東の諸国出身。

その国の歴史は闘いに明け暮れたと言っても良いほど。強くならなければ生きてゆけない、強くなければ隣国に滅ぼされる。

そこで崇められているのが闘神ザンジバル。

皆闘いの前にはザンジバルに祈り必勝を誓った。そのザンジバルが勇者とは言えまだ若い百合子と契約したのが信じられずワトリは怒ったのだ。

「しかしザンジバル様との契約に成功したとは……………勇者だけの事はありませんな」

ワトリは自身を落ち着かせるように言う。

まさか契約の内容が『あっち向いてホイ』だとは知らず。

「コホン、そして最後ですが……………」

リゼレバも立ち直り三枚目の羊皮紙を手取る。

「落ち着いて聞いて下さい」

リゼレバはそう言い唾を飲む。

「時の女神アフラレーヌ。神順位5位……………です」

その瞬間場は水を打ったように静まり返り予め聞いていたサーラと

リゼレバ以外は驚愕している。

八陽神と言われている神達の存在。八陽神は他の神とは別格とされている。それはこの世界を造り上げたのが八陽神とされているからだ。

全ての母である女神ヴェルファ。

そのヴェルファが生み出した数多の神々の内八陽神が世界を造り出した。

大地を空を海を生き物を……

その八陽神は神順位で1位から8位にある。

過去に八陽神と契約した者は居らずこれからも居ないとされてきた。

それも当然でこの世界を造り出した創造主と契約など出来る訳がないのが常識だった。

それが……

「本当……なのか？」

ワトリは若干唇を震わせながらリゼレバに聞く。

「確認しましたので間違いありません」リゼレバはシッカリ頷く。

神の奇跡王宮統括責任者であるリゼレバ。

高位の神と契約していれば王宮に仕えるのは難しくない。が、嘘を申告している可能性がある。

それをリゼレバが調べるのだ。

方法はある装置を使う。その装置は円形の魔法陣のような物で中心で契約した神の名を言うと言った様々な変化をする。その変化で本当か嘘かを判定する。

「これが百合子様の契約した神です。これほど高位の神と契約した者は今現在どの国にも確認されておりません」

「困りましたな」

ファブラテが眼鏡を外し拭きながらポツリと言う。

サーラもファブラテに同感だった。

勇者である百合子ならソコソコ高位の神と契約するのは予測出来た。

しかし余りに高位過ぎる。

45位のエスリはまだいいとしても12位のザンジバルはワトリが動揺したように他の地域では崇められる神。5位のアフラレーヌに至っては神話の中に出てくるような存在。

この事が他の国に解ればかなり面倒な事になるのは明白。

戦時中ならともかく平時の今にこの事がバレれば要らぬ思惑を生みいざこざが起きる事も有り得る。

魔王が現れると神託があつた以上足並みを乱す事はしたくない。

「よいですか、始めにも言いましたがこの事は決して漏らしてはなりません。百合子様が勇者なのは時が来るまでは機密にします」

サーラはそう言うつと解散とし皆部屋を出て行く。

「くくく……報告だな」

部屋に潜んでいる影があつたのを知る者はなかった。

10話 風の気質

一人の男がグラスの赤い酒を飲み干す。

ブクブクと太った醜い体。弾力のあるソファ―に身を沈め下品に笑っている。

「ぶひゃひゃひゃー!!そうかそれ程か、ならやる事は一つだの」

「と申しますと?」

「我が手駒にするのだ」

「はっ……」

影が音も無く部屋から消える。

「ぐふふ……楽しみだ……」

百合子の立場が取り敢えず決まった。

魔王が確認されるまではサーラの客人として扱われる事になった。

「『エスリ』」

百合子の服が風にはためく。

「おっ!？」

百合子の身体がふわりと浮く。

「きゃあ!？」

が、バランスを崩し転んでしまう。

「大丈夫か百合子殿!？」

「えへへ、失敗ね」

レイの差し出された手を握り起き上がる百合子。
今の百合子は赤いズボンに白い上着と動きやすい格好をしている。

此処は城の中庭。

百合子が今やることは『神の奇跡』である力を使いこなす事。

百合子が契約した三人の神は確かに高位だが直ぐに使いこなせる訳ではない。

力が強い分制御が難しい。

いざ魔王が現れ戦う時に自爆したのでは目も当てられない。

そんな事で先ず百合子は風の力を使うエスリから練習していた。

「エスリはあんな簡単に飛んでただけだなあ」

エスリの能力は風を纏わせ空を飛ぶ事。

自分が飛ぶだけならもつと神順位の低い物にもある。

エスリの凄い所は自分だけではなく他の人や物等にも風を纏わせ飛ばせる事が出来る点にある。

戦いでも敵に風を纏わせ吹き飛ばすという芸当も出来る。

ただ先程から何回も百合子は練習しているが一度もまともに飛ばないでいた。

「百合子様、そう直ぐに出来る事ではありませんから慌てないでやりましょう」

「リゼレバの言うとおりだ。まずは感覚を掴む事だ」

百合子を指導しているのが神の奇跡に詳しいリゼレバに百合子と同じ風の力が使えるレイ。

「うんそうね。……『エスリ』」

再び百合子は『神の奇跡』を発動させる。

力を使うには契約した神の名を言わなければならない。それが発動の鍵であり引き金になる。

今度はバランスを崩す事なく浮く。

「いけるかも」

今日一番の手応えに好感触の百合子だが、

ギョーンッ!!

「え? きゃあ!!」

突然急上昇する。

地上30メートル地点まで来ると止まり風の力が霧散する。

「きゃあー!!」

当然落下する百合子。

「おっと」

しかしすぐさまレイが空中で百合子を受け止める。

「助かりましたレイさん」

「いえいえ。これぐらい何でもないですよ」

地上に降りとりゼレバは休憩を提案する。

『神の奇跡』は慣れないとかなり精神的に疲労する。

実際百合子もヘトヘトで直ぐにでもベッドに飛び込みたい気持ちだった。

「ごめんねりゼレバさん。面倒かけちゃって」

「そんな事ありません。初めてにしては良く出来てましたよ」

この言葉はお世辞ではなく本音だった。

一般的だと最初は『神の奇跡』を発動させるだけでも上手くいかな

い。
「そうですよ百合子殿。私なんかは浮くだけでも一週間かかりました」

この場合でも早い方で下手をすると一生まともに『神の奇跡』を使えない者もいる。
それ程難しい。

「あれ？また？」

目の前にはまた草原が広がっていた。

「苦労してるようだね」

ギザッたらしい話し方をする妖精のような少年がふわりと百合子の肩に降りる。

「エスリ？ 此処どこ？」

「忘れたのかい？ 僕達は夢の中で会えるんだよ？」

「そう言えば……………」

そんな事も言ってたなと思い出す。

「相変わらずのんびりとしたお嬢さんだねえ」

エスリはやれやれと大袈裟にため息を吐く。

「ふふ……」

そのまるで芝居をしているような姿に微笑む。

「で、僕の力はどうだい？」

「凄いと思うんだけど上手く出来なくて」

百合子は今日の修練内容をエスリに話す。

「風を操ろうとしたら駄目だよ」

「そうなの？」

「風は形の無い物だからね。操ろうとするんじゃないかって流れを変えてやるんだ」

「流れを変える?」

「そうさ、風は常に流れている自由な物。だから操ろうとすると反発する。君なら出来るよ」

「……………ありがとう。頑張ってみる」

「素敵な笑顔だ」

エスリは少しだけ触れるように頬にキスし飛び立つ。

「僕は君の味方だからね!」

「うん!」

翌日。

百合子は再び中庭に居た。

「『エスリ』」

力を発動させる。

百合子はエスリに言われたよう風を意識する。
自分の身体に風が流れる。

昨日はこの風を強引にまとめようとしていた。

（ごめんね…）

百合子は謝り今度は風の向きを変えよう意識する。
すると風は自分の身体の周りを回り始める。

「おお…」

「これは…」

レイとりゼレバは明らかに昨日と違う百合子の様子に釘付けになる。

（いけるー！！）

ふわりと百合子の身体が浮き上昇する。

（止まって…）

五メートル上昇した時点で止まる。

風の流がハッキリと百合子には解る。

「出来たー！！」

感激するが、

「はれ？」

集中が解けてしまったのか風が霧散する。

と、なると当然…

「きゃあああー！！」

落下する。

「百合子殿!!」

しかしレイが素早く落下地点に移動し百合子を受け止める。

「またごめんねレイさん」

「間に合って良かったですよ」

「でも出来たよねレイさん」

「ええお見事です。これなら自在に使えるのも直ぐですよ」

「本当!? 嬉しいな!!」

「うつ…」

「どうかした?」

「いえいえ!? 何でもありません!?!」

笑顔の百合子をまともに見てしまい顔を真っ赤にさせてしまうレイにそれが解らず首を傾げる百合子。

「初々しくていいですね…」

そしてそれを羨ましそうに眺める既婚のリゼレバだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8719t/>

弱気な少女の勇者伝説

2011年6月20日16時43分発行